浮気妻の制裁

第三巻　丸裸にされた私生活

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　全裸生活を強いられた若妻
■海老沢薫　ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

※海老沢薫　ＢＬＯＧ
http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「浮気妻の制裁　第三巻　丸裸にされた私生活」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

マンションの隣の部屋に住む主婦、麻子に恥ずかしい弱みを握られ、服従を誓わされた二十四歳の若妻、萌々。

萌々は麻子から家の中に一人でいる時には素っ裸でいる事を義務づけられ、さらに部屋の中に小型カメラまで設置されて、私生活を完全に丸裸にされることになった。

自宅のソファに一人素っ裸で座る萌々は何とも言えない虚しさに駆られ、隣家の麻子の奴隷に成り下がってしまったことを嘆いた。

すると突然、部屋に設置された小型カメラのスピーカーから麻子の声が響き、萌々に屈辱の命令が告げられる。

小型カメラに通話機能まで備わっていることを知らなかった萌々は驚きながらも、麻子の命令を実行するために一糸纏わぬ姿のままベランダに出た。

萌々がベランダに素っ裸で立ち尽くしていると、隣のベランダとの仕切り越しに麻子が

顔を出し、早速若妻の調教を開始する。

なんと、萌々は朝の体操と称して自宅ベランダに一糸纏わぬ姿のまま外に向かって立たされ、両手を頭の後ろで組んだ恰好で腰を左右に振らされたのだ。

萌々は顔を真っ赤に染め、外から誰かに見られてしまわないかとドキドキしながら屈辱の裸踊りを続け、麻子は若妻の新たな脅迫材料にするべく、その様子をスマホで撮影した。

萌々はこれから毎朝ベランダで裸踊りをすることを義務づけられ、羞恥と恐怖に部屋の中で怯える。

するとその時、隣家の麻子が部屋の中まで押し掛けてきて、若妻をさらなる羞恥地獄の舞台へ引きずり込もうとするのだった。

一緒にランチをしようと持ちかけた麻子は、萌々の部屋にデリバリーのピザを頼み、デリバリーの男が到着すると、萌々に一糸纏わぬ姿のまま玄関まで受け取りに行くよう命じた。

「お願いです、何か着させてください！」

必死に懇願する萌々に対し、麻子は容赦ない言葉で突き放した。

「ダメよ、そのまま裸で出なさい！それから手で体を隠したら許さないから」

麻子の恐ろしさを改めて実感した萌々はもう縋るのを諦め、一糸纏わぬ姿のまますべてを晒し、死ぬ思いで玄関の方へゆっくりと歩き出したのだった。

■第一章　全裸生活を強いられた若妻

平日の昼下がり、二十四歳の若妻、白石萌々は素っ裸でリビングの床に呆然と座り込んでいた。

さっき突然部屋に押し掛けて来た隣に住む麻子に、萌々は持っている下着を全部奪い取られ、挙句の果てにリビングと寝室に小型カメラまで設置されて、私生活を完全に丸裸にされてしまったのだった。

それは麻子の奴隷に成り下がってしまったことを意味し、萌々は自分の家に引きこもっていても全く生きた心地がしなかった。

きっと今も、リビングの隅の棚に置かれた小型カメラで、隣家の麻子はこの部屋の様子を監視しているに違いないのだ。

こんなの酷過ぎる・・・。全裸生活を強いられることになった萌々は、隣家の住人のあまりに卑劣な行為を許せなかった。

幾ら自分が夫以外の男と浮気をしていた淫らな女だとしても、ここまでされる覚えは全くなかった。萌々は次第に麻子に対する憎しみを募らせ、おもいきって小型カメラのレンズを部屋の様子が映らない方向へ向けようかと考えた。

そうして、萌々は立ち上がると小型カメラの方にゆっくりと近づき、棚の上に置かれたそれに手を伸ばしてレンズの向きを変えようとした。

すると突然、小型カメラに備わったスピーカーから隣家の麻子の怒声が響いてきたのだった。

『ちょっと何してるの！止めなさい！カメラを触ったらアナタの恥ずかしい写真を今すぐマンション中にばらまくわよ！』

萌々は麻子の声が聞こえると急に怖じ気づき、さっきまでの憎しみや強がりは消え失せ、カメラに伸ばした手をすぐに引っ込めた。

『変なマネしたら許さないから！』

麻子の怒声が再び小型カメラのスピーカーから響くと、萌々はカメラレンズに向かって思わず「ごめんなさい」と返事した。

小型カメラには監視機能だけでなく通話機能まで備わっていることを初めて知った萌々は、ますます生きた心地がしなくなった。これでは自宅に引きこもっていても、隣家の麻子から監視された上に命令まで受けることになるのだ。

『アナタのことはいつでも見ているから覚悟しなさい！それからなるべくその部屋にいなさい、いいわね！』

小型カメラのスピーカーから再び麻子の声が響くと、萌々は酷く怯えた様子でカメラレンズに向かって頷いた。

それから、萌々は自宅に一人でいる時にはいつも素っ裸で過ごさなければならなくなった。それは萌々をとても惨めな気持ちにさせ、裸でソファに座ってテレビを観たり、食卓で

食事をしていると自己嫌悪に陥りそうになった。

そうして、萌々の全裸生活が始まって三日が過ぎた頃、若妻をさらなる羞恥地獄へ突き落とす出来事が起きた。

朝、夫が出勤した後、いつものようにリビングで服を脱いで裸になった萌々は、棚に置かれた小型カメラを意識しながら家事をこなしていた。カメラの向こうで隣家の麻子が自分を嘲笑っていると思うと、萌々は悔しく、そしてなぜか下半身が無性に疼くのを感じた。

全裸生活が始まって一番厄介だった事は、ベランダに出て洗濯物を干す時だった。萌々の部屋はマンションの三階で、外を歩く通行人が見上げれば良く見える高さにあった。だからもし、素っ裸で洗濯物を干しているところを誰かに見られたらと思うと、萌々は不安で仕方なかった。ベランダに出る時は自然と

脚が震え、まるで犯罪を犯しているような気分になったのだ。

午前十時を過ぎ、家事を終えた萌々がリビングのソファにボッーと座っていると、突然小型カメラのスピーカーから隣家の麻子の声が響いてきた。

『おはよー、ようやく家事が終わったようね。それじゃあ今からベランダに出て体操しなさい！外の方を向いて立って、両手は頭の後ろで組んで、腰を左右に振るのよ！私は隣のベランダから見ているわ』

それは麻子からの新たな屈辱の命令であった。

萌々はソファに座ったまま急に顔面蒼白となり、恐怖に体の震えが止まらなかった。こんな一糸纏わぬ姿でベランダに出て、外を向いて体操するなどあり得ない事だった。

しかし、麻子の命令に逆らえば一体どうなるか、それは萌々にも良く分かっていた。だからどれだけ屈辱的で、あり得ない命令であっても、萌々は拒絶することができなかった。

『ほら、サッサとやりなさい！』

萌々がいつまでもソファに座っていると、スピーカーから今度は麻子の怒声が響いた。

あぁん、本当に酷い人・・・。萌々は心の中でそう呟きながらソファから立ち上がると、恐る恐る窓の方に近づき、外から見られていない事を十分に確認してからベランダに出た。

萌々は体を小刻みに震わせながら両手を上に挙げ頭の後ろで組んだ。これで外に向かって乳房をおもいきり見せつけるような恰好になり、萌々は恥ずかしさのあまり脚をガクガク震わせた。そして、萌々が乳房を晒したままベランダに突っ立っていると、隣のベランダとの仕切り超しに麻子が顔を出してきたのだった。

「キャッ」

萌々は突然現れた麻子に驚き、小さな悲鳴を上げた。

「いつまでそこに突っ立っているつもり！サッサと腰を振りなさい！」

麻子はベランダの仕切り越しに素っ裸の若妻を見つめながら、強い口調で命じた。

「は、はい・・・」

萌々はどこまでも高圧的な態度の麻子に怯え、素直に頷くと腰をゆっくりと左右に振り始めた。

「もっと激しく振りなさいよ！」

萌々が恥ずかしそうに腰を弱々しく振っていると、麻子はさらに声を荒げた。

「ご、ごめんなさい・・・」

萌々はすぐに謝り、腰をさらに大きく振り乱していった。

「もっと激しく！」

麻子は容赦なく若妻を叱り続け、結果、萌々は素っ裸であるにも関わらず、ベランダで腰を左右に激しく振り乱し、その豊満な乳房までもが上下左右に激しく揺れ、麻子の目を大いに楽しませた。

あぁん、恥ずかしい・・・お願い、もう許して・・・。萌々はいつ誰に見られるかも分

からない場所で卑猥な裸踊りを続けることにどうしようもない恥ずかしさと焦りを覚えていた。

「それじゃあ、脚をもう少し開いて今度は腰を前後に振り乱しなさい！」

麻子がベランダの仕切り越しにそう命じると、萌々は一瞬麻子の方を恨めしそうに見つめた後、指示通りに脚を肩幅まで開き、左右に振っていた腰を今度は前後に振り始めた。

いやぁん、恥ずかしい・・・。またしても卑猥な裸踊りをさせられることになった萌々は、屈辱に表情を歪め唇を噛みしめた。こんな姿をもしも外を歩く通行人や少し離れた場所にあるマンションの住人にでも見られたら、絶対に変態女だと思われ、下手をすれば警察に通報される恐れさえあった。

お願い、もう許して・・・。萌々は腰を前後に振り乱しながら、心の中で必死にそう叫んでいた。すると、麻子はそんな若妻の願い

を打ち砕くかのように、さらに屈辱的な命令を告げた。

「ちょっと表情が堅いから、笑顔でやりなさい！」

それは羞恥地獄の只中にいる若妻にとって、あまりにも酷な命令であった。

こんな状況で笑えだなんて、あんまりだわ、私をどこまで辱めれば気が済むの・・・。麻子の命令を聞いた萌々は悔しさに震え、どうしようもない怒りが込み上げてくるのを感じた。

「ほら、サッサとやりなさいよ！」

萌々がなかなか笑顔を浮かべずにいると、麻子は隣のベランダから怒鳴り声を上げた。

「あぁん、ごめんなさい・・・」

麻子の圧力に恐れおののいた萌々はすぐに謝ると、ゆっくりと口角を上げ、引きつった笑みを浮かべて見せたのだった。

それは明らかに無理矢理やらされていると分かるぎこちない笑顔で、それを見た麻子の加虐心に火を付けた。

「ほら、もっと心からの笑顔を浮かべなさい！それから腰の振りが鈍くなってきているわよ！」

麻子が容赦なくそう命じると、萌々は死ぬ思いでさらに口角を上げていき、白い歯を覗かせて笑みを浮かべた。そして、腰を前後に激しく振り乱していったのだった。

■海老沢薫　ＢＬＯＧ

・・・海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈25歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885